平成10年度

加茂市内遺跡確認調査報告書

たて屋敷遺跡

蚊口太遺跡

草生津遺跡

伝涌泉寺跡遺跡

大塚遺跡

馬越遺跡

鬼倉遺跡

1999

新潟県加茂市教育委員会

平成10年度

加茂市内遺跡確認調査報告書

たて屋敷遺跡

蚊口太遺跡

草生津遺跡

伝涌泉寺跡遺跡

大塚遺跡

馬越遺跡

鬼倉遺跡

1999

新潟県加茂市教育委員会

序

北越の小京都、加茂市は新潟県のほぼ中央に位置し、東西に長い形の地勢であります。その地勢に育まれた遺跡は市内のいたるところに存在し、現在約160余りが知られています。遺跡の時代別の分布を大まかに見ると、旧石器時代、縄文時代の原始時代の遺跡は主に七谷地区に存在し、古墳時代～平安時代の古代遺跡は市域西側の平野部を中心に存在するようです。これは加茂市の地理的環境が大きく関わっているものと考えられます。

現在の私たちの暮らしは過去から連綿とつながり、歴史を重ねてきました。その中で、住みよい町づくりを進めるには、必ず遺跡との関わりがでてきます。加茂市教育委員会ではその開発と遺跡の関係を探る目的で、平成7年度から加茂市内遺跡の確認調査を実施しております。

本年度はその4年次目にあたり、七谷地区のたて屋敷遺跡、蚊口太遺跡、草生津遺跡、伝涌泉寺跡遺跡、加茂地区の大塚遺跡、下条地区の馬越遺跡、鬼倉遺跡が調査され、各地区の歴史を紐解く数々の出土品がありました。本書はこうした事業により得られた情報の一部の報告ですが、加茂市の遺跡をより身近に感じて頂ければこの上なく幸いなことであります。

最後に、本事業に格別なるご指導を賜った新潟県教育庁文化行政課をはじめ、調査に従事された調査員、作業員各位、ならびに調査にご理解、ご協力いただいた事業者、地権者及び工事関係者に対し、ここに深甚なる謝意を表する次第であります。

平成11年5月

加茂市教育委員会
教育長　土　佐　　弘

例　言

1．本報告書は、平成10年度に新潟県加茂市内における各種の開発に伴い実施した７遺跡の確認調査の記録である。本事業は、「加茂市内遺跡発掘調査」として、平成７年度から実施しているものである。

2．調査は、たて屋敷・蚊口太・草生津・伝涌泉寺跡遺跡が県営中山間地域農村活性化総合整備事業に、大塚遺跡が雨水排水ポンプ場建設工事に、馬越遺跡・鬼倉遺跡が県営ほ場整備事業に係わり、遺跡取り扱いの事前協議資料を得るために実施したものである。

3．確認調査の経費は、国庫及び県費の補助金交付を受けた。

4．調査は加茂市教育委員会が主体となり、実施した。調査体制は以下の通りである。

調査主体	加茂市教育委員会	教育長	土佐　弘
総括		社会教育課長	田澤弘一
管理		社会教育課課長補佐	相田喜一郎
庶務		社会教育課主事	塚野正明
調査担当		社会教育課主事	伊藤秀和
調査補助員		日々雇用職員	山田　昇
		日々雇用職員	鈴木　進（鬼倉遺跡）

現場作業員　有本七次・泉田政広・小柳ツル・加藤芳司・珊瑚順一・珊瑚ヤイ子・茂野健太郎・茂野丈夫・鈴木忠一・鶴巻英一・鶴巻　信・中村ミサ（加茂市シルバー人材センター会員）

整理作業員　武田陽子・増井君子・横山敦子・涌井恵子

5．本調査により出土した遺物や図面・写真などは加茂市教育委員会が一括して保管している。

6．本報告書の編集・執筆はすべて伊藤が行ったが、遺物写真撮影及び編集の一部については山田昇、鈴木進の補助を受けた。

7．本書で示す方位は第７図、第15図を除いて真北である。磁北は真北から西偏約７°10′である。

8．本書に掲載した遺物は各遺跡毎に通し番号を付し、実測図と写真の番号は同一としている。

9．第16図、第19図（21は除く）における拓本図は断面右側が外面、断面左側が内面を表す。

10．第２表遺物観察表の色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局・㈱日本色彩研究所監修『新版標準土色帖』をもとに記述した。また、馬越遺跡出土遺物No.24古銭の測点については、〔永井1994〕のＰ－９を参考に行った。

11．発掘調査から本書の作成にあたり、下記の諸氏・機関から多大な御教示・御協力を賜った。厚く御礼申し上げる次第である。（敬称省略・五十音順、機関などは順不同）

安藤正美・大橋信彦・春日真実・金子拓男・金子正典・北村　亮・坂上有紀・澤田　敦・関　正平・高橋雅弘・高花宏行・田村浩司・立木宏明・寺崎裕助・鳴海忠夫・古川信三・本間秀之・渡邊明和・加茂市シルバー人材センター・加茂市農林課・加茂市下水道課・三条農地事務所・三条土地改良区・㈱小柳建設・㈱渡辺建材・新潟県教育庁文化行政課・㈶新潟県埋蔵文化財調査事業団

目　次

Ⅰ　序　　説 …… 1
1　平成10年度事業の概要 …… 1
2　遺跡の位置と環境 …… 2

Ⅱ　県営中山間地域農村活性化総合整備事業関連 …… 3
1　調査に至る経緯 …… 3
2　たて屋敷遺跡第１次調査 …… 4
（1）遺跡と発掘調査の概要 …… 4
（2）層　　序 …… 4
（3）遺構と遺物 …… 5
（4）調査のまとめ …… 5
3　蚊口太遺跡第２次調査 …… 5
（1）遺跡と発掘調査の概要 …… 5
（2）層　　序 …… 7
（3）遺構と遺物 …… 7
（4）調査のまとめ …… 8
4　草生津遺跡第２次調査 …… 8
（1）遺跡と発掘調査の概要 …… 8
（2）層　　序 …… 8
（3）遺構と遺物 …… 8
（4）調査のまとめ …… 8
5　伝浦泉寺跡遺跡 …… 9
（1）遺跡と発掘調査の概要 …… 9
（2）層　　序 …… 10
（3）遺構と遺物 …… 10
（4）調査のまとめ …… 10

Ⅲ　雨水排水ポンプ場建設工事関連 …… 11
1　調査に至る経緯 …… 11
2　大塚遺跡 …… 11
（1）遺跡と発掘調査の概要 …… 11
（2）層　　序 …… 11
（3）遺構と遺物 …… 11
（4）調査のまとめ …… 13

Ⅳ　県営ほ場整備事業関連 …… 14
1　調査に至る経緯 …… 14
2　馬越遺跡 …… 14
（1）遺跡と発掘調査の概要 …… 14
（2）層　　序 …… 15
（3）遺構と遺物 …… 16
（4）調査のまとめ …… 18
3　鬼倉遺跡 …… 18
（1）遺跡と発掘調査の概要 …… 18
（2）層　　序 …… 18
（3）遺構と遺物 …… 18
（4）調査のまとめ …… 18

Ⅴ　ま　と　め …… 20
引用・参考文献 …… 20
遺物観察表 …… 21
報告書抄録 …… 22

挿図目次

第１図　調査対象遺跡位置図（Ｓ＝１／100,000）…… 2
第２図　大谷地区遺跡分布図（Ｓ＝１／40,000）…… 3
第３図　たて屋敷遺跡確認調査トレンチ設定図（Ｓ＝１／2,000）…… 4
第４図　たて屋敷遺跡土層柱状図 …… 5
第５図　蚊口太遺跡確認調査トレンチ設定図（Ｓ＝１／2,000）…… 6
第６図　蚊口太遺跡土層柱状図 …… 6
第７図　蚊口太遺跡立ち会い調査トレンチ遺構配置図（Ｓ＝１／400）…… 7
第８図　蚊口太遺跡出土遺物 …… 8
第９図　草生津遺跡確認調査トレンチ設定図（Ｓ＝１／2,000）…… 9
第10図　草生津遺跡土層柱状図 …… 9
第11図　伝涌泉寺跡遺跡確認調査トレンチ設定図（Ｓ＝１／2,000）…… 10
第12図　伝涌泉寺跡遺跡土層柱状図 …… 10
第13図　大塚遺跡確認調査トレンチ設定図（Ｓ＝１／1,000）…… 12
第14図　大塚遺跡土層柱状図 …… 12
第15図　大塚遺跡９・14トレンチ遺構確認図 …… 13
第16図　大塚遺跡出土遺物 …… 13
第17図　馬越遺跡確認調査トレンチ設定図（Ｓ＝１／4,000）…… 15
第18図　馬越遺跡土層柱状図 …… 16
第19図　馬越遺跡出土遺物 …… 17
第20図　鬼倉遺跡確認調査トレンチ設定図（Ｓ＝１／2,000）…… 19
第21図　鬼倉遺跡土層柱状図 …… 19

写真図版目次

図版１　たて屋敷遺跡遠景　南東から、たて屋敷遺跡調査風景、３トレンチ土層断面　西から、５トレンチ土層断面　東から、６トレンチ土層断面　西から、11トレンチ土層断面　北から、13トレンチ土層断面　北から、16トレンチ土層断面　東から
図版２　蚊口太遺跡遠景　東から、蚊口太遺跡調査風景、蚊口太遺跡調査風景、２トレンチ土層断面　南から７トレンチ土層断面　北から、11トレンチ土層断面　北から、18トレンチ土層断面　西から、24トレンチ土層断面　南から
図版３　28トレンチ土層断面　北から、50トレンチ土層断面　東から、Ａトレンチ調査状況　南から、Ｐ－１完掘状況　北から、Ｂトレンチ調査状況　東から、Ｂトレンチ調査状況　西から、Ｐ－９～12完掘状況　北西から、蚊口太遺跡出土遺物
図版４　草生津遺跡遠景　北から、草生津遺跡調査風景、５トレンチ土層断面　南から、11トレンチ土層断面　西から、伝涌泉寺跡遺跡遠景　南東から、伝涌泉寺跡遺跡調査風景、２トレンチ土層断面　南から、７トレンチ土層断面　南から
図版５　大塚遺跡調査地近景　西から、大塚遺跡調査風景、１トレンチ土層断面　西から、９トレンチ土層断面　南東から、11トレンチ土層断面　南東から、14トレンチ土層断面　北から、大塚遺跡出土遺物
図版６　馬越遺跡調査地遠景　北東から、馬越遺跡調査風景、５トレンチ土層断面　南から、６トレンチ土層断面　南から、９トレンチ土層断面　南から、13トレンチ上層面遺構確認状況　南から、13トレンチ土層断面　南から、14トレンチ土層断面　南から
図版７　馬越遺跡出土遺物
図版８　鬼倉遺跡調査地近景　東から、鬼倉遺跡調査風景、３トレンチ土層断面　南から、４トレンチ土層断面　南から、５トレンチ土層断面　南から、７トレンチ土層断面　北から、８トレンチ土層断面　北から、10トレンチ土層断面　北から

表目次

第１表　平成10年度発掘調査工程表 …… 1
第２表　遺物観察表 …… 21

Ⅰ 序　説

1　平成10年度事業の概要（第１表）

本年度は、平成７年度から確認調査が開始された大谷地区の県営中山間地域農村活性化総合整備事業に係わり４遺跡、市公共下水道事業の雨水排水ポンプ場建設に係わり１遺跡、吉津川地区県営ほ場整備事業に伴う工業団地造成及び知的障害者援護施設建設計画に係わり２遺跡、合計３事業に対し７遺跡を対象に年度当初から年度末にかけて本発掘調査の合間を見て、遺跡の規模・内容を確認するための市内遺跡確認調査事業を実施した。本年度は当該事業の４年次目に当たる。

大谷地区の県営中山間地域農村活性化総合整備事業については、すでに平成７年度に上大谷地内、草生津遺跡を、平成８年度に蚊口太遺跡、寺屋敷跡を対象に確認調査を実施している〔伊藤1996ａ、伊藤1997ａ〕。本年度は工事の及ぶ区域、地元住民の要望などを考慮し、たて屋敷遺跡、蚊口太遺跡、草生津遺跡、伝涌泉寺跡遺跡の計４遺跡を対象にし、田植え前の４月に調査を行った。また、蚊口太遺跡については平成８年度及び今回の調査結果をもとに、一部切土が及ぶ区域について立ち会い調査を行った。なお、本事業に係わる遺跡確認調査は平成11年度においてすべて完了する予定である。

雨水排水ポンプ場建設は２カ年度にまたがる事業で、周知の大塚遺跡の一部を含むため、市下水道課と協議の上、上記大谷地区の調査終了後に確認調査を行った。すでに加茂市が用地買収済であったこともあり、調査日程の調整が求められていた。現況においてかなりの残土が置かれ、掘削に手間がかかったが、遺構・遺物が僅少なこともあり、数日間で調査を終えることができた。

吉津川地区県営ほ場整備事業においては、下条地区において創設非農用地における工業団地造成及び知的障害者援護施設建設が計画され、折しも国道403号線バイパス工事に伴い実施中の馬越遺跡発掘調査現場に隣接することや周知の鬼倉遺跡の範囲に含まれることなどから確認調査を実施することになった。工業団地造成予定地においては、馬越遺跡発掘調査と並行して行わざるを得なかった。知的障害者援護施設建設予定地は最終予定地決定までしばらく日時を要し、年末に実施することになった。なお、当該ほ場整備事業に係わる確認調査は来年度以降にかけて、本格化する予定である。

遺跡名・調査次	遺跡の主な時代	平成10年3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	平成11年1月	2月	3月
確認調査														
大谷地区内（たて屋敷遺跡第１次・蚊口太遺跡第２次・草生津遺跡第２次・伝涌泉寺跡遺跡）	縄　文 〃 中　世		――	―	―									
大　塚　遺　跡	平　安				―									
馬越遺跡周辺	奈良～中世							―						
鬼　倉　遺　跡	平　安										―			
本発掘調査														
馬　越　遺　跡	奈良・平安					――	――	――	――	――	――			
新　涌　遺　跡（山武考古学研究所調査）	古　墳						――	――	――					
丸　島　遺　跡（山武考古学研究所調査）	古　墳							――	――	――	――			

第１表　平成10年度発掘調査工程表

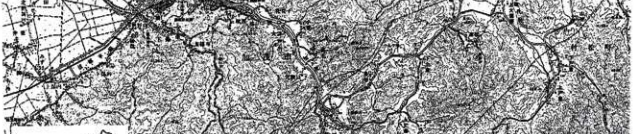
2　遺跡の位置と環境（第１図）

加茂市は新潟県のほぼ中央部に位置し、東に村松町、西に三条市、南に下田村、北に白根市・田上町と接し、中越地区に含まれる。市域は東西方向に細長い形状を呈し、東部に粟ケ岳、権ノ神岳などの 1,000 m級の山地がそびえ、粟ケ岳を源とする加茂川が、支流である小乙川・高柳川・大谷川・西山川などを集めて谷底平野を抜け信濃川に注いでいる。

七谷地区は加茂川とその支流域沿いに展開する。遺跡は縄文時代、中世城館跡が顕著に見られ、僅かながら旧石器時代の遺跡も確認されている。中でも大谷地区は一番大きい可耕地に恵まれた地域で、大谷川沿いには未発達ではあるが段丘地形が形成され、小規模な縄文時代の遺跡が比較的多く知られている。本年度調査対象となった蚊口太遺跡、草生津遺跡、伝涌泉寺跡遺跡は縄文時代の遺跡である。たて屋敷遺跡は以前に中世陶器が採集されたことや周辺の地籍図、地名の検討などから「大谷館跡」と呼称され、その構造と性格が推測されている〔高橋1997〕。

加茂川は谷底平野を抜けると丘陵沿いから扇状地形を発達させ、そこに現在の市街地区域が立地する。加茂市域の沖積低地部には近年、弥生時代後期～古代（主に古墳前期、平安時代）の遺跡が濃密に分布することが明らかにされており〔伊藤1997ａ、伊藤1998〕、調査対象となった大塚遺跡、馬越遺跡、鬼倉遺跡も古代の遺跡である。なかでも、平成９年度に国道 403 号線バイパス建設に関連し発掘調査された鬼倉遺跡からは旧河川跡等から多量の９世紀代の遺物が出土し、加茂市で初めてのまとまった資料として注目される〔伊藤1997ｂ・加茂市教育委員会1998ａ〕。特に墨書土器や和同開珎、神功開寶などの銭貨、石帯が出土しており、その遺跡の性格が問題となる。

大塚遺跡は加茂川左岸の自然堤防上に立地し、流域沿いに展開する遺跡である。馬越遺跡は国道 403 号線バイパス建設に関連した調査で、８世紀中頃～10世紀前半頃の集落跡が検出され、豊富な資料も出土している〔加茂市教育委員会1998ｂ〕。加茂市は古代蒲原郡青海郷域に比定されながら、長らく該期の考古資料が不足していたが、ここ数年で良好な資料の蓄積がはかられ、今後の検討が待たれている。



第１図　調査対象遺跡位置図（Ｓ＝１／100,000）

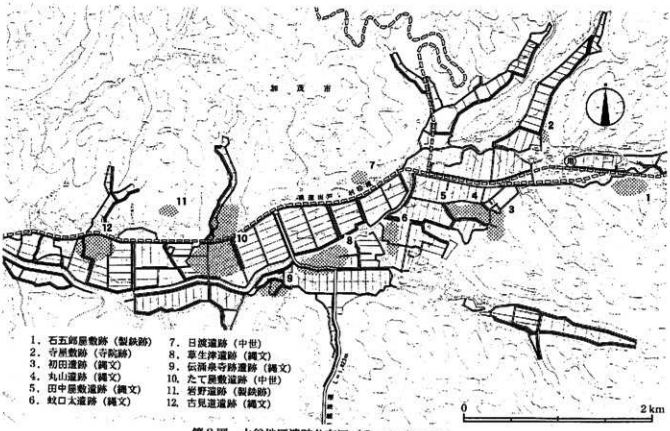
Ⅱ　県営中山間地域農村活性化総合整備事業関連

1　調査に至る経緯

市教委は本事業と埋蔵文化財の取り扱いについて平成６年度から三条農地事務所及び加茂市農林課と協議を始め、平成７年度に詳細分布調査を行い、従来の周知遺跡の確認と同時に数カ所で新たに遺跡を確認し〔高橋1997〕、その結果をもとに協議を継続した。その中で、第２図１、３～５、７、11の遺跡については、事業計画区域外となるため、ひとまず協議対象から除外した。そして、平成７年度は上大谷地内、草生津遺跡を平成８年度は蚊口太遺跡、寺屋敷跡を対象に確認調査を実施してきたところである。その結果については報告書に示したが、蚊口太遺跡から縄文中～後期の土器が多く出土し、集落の存在が想定された〔伊藤1997ａ〕。しかし、その際降雪期を迎えたこともあり、遺跡の範囲を完全に把握するまでには至らなかった。

平成10年３月の事業推進委員会において市教委は、調査対象面積を拡大した蚊口太遺跡第２次確認調査の必要性と平成10年度の確認調査予定を説明した。その席上において、今後の工事予定に関係し、本地域における最大の推定面積を有するたて屋敷遺跡について早急に調査して欲しいとの要望があり、予算と日程を考慮し、たて屋敷遺跡から調査を開始することになった。なお、調査対象地においては本年も作付けすることになっていたが、今後の遺跡のあり方によって事業の進捗に影響を及ぼすことから、春先に確認調査を実施することになった。

市教委は平成10年４月６日付け民資第41号でたて屋敷遺跡、蚊口太遺跡、草生津遺跡、伝福泉寺跡遺跡についての文化財保護法第98条の２第１項に基づく埋蔵文化財発掘調査の報告を県教育庁文化行政課長宛に行い、確認調査を開始した。



第２図　大谷地区遺跡分布図（Ｓ＝１／40,000）

2　たて屋敷遺跡第１次調査

（１）遺跡と発掘調査の概要（第３図）

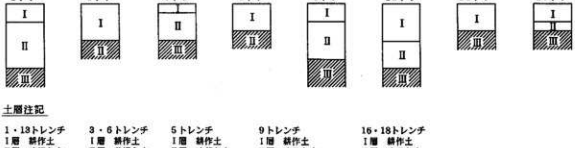
たて屋敷遺跡は加茂市大字下大谷字岩野ほかに所在する。平成７年度に行われた分布調査で、「館屋敷」と呼ばれる現況畑地のところから中世陶器数点が採集されたことから、遺跡と把握された。遺跡は山稜から緩やかに大谷川に向かい舌状に伸びる台地と大谷川右岸の平地に展開する。周辺には「町屋敷」、「番場田」などの地名がのこることや地籍図の検討から町屋の名残と考えられる細長い短冊状の地割りが確認できるという指摘があり中世城下町の諸相の一端を解明する重要な事例として、考古学的な調査が期待されている状況にあった〔高橋1997〕。

調査は当初から計画したものではなかったが、地元の要望などがあり、年度当初から取りかかった。しかし、遺跡推定範囲内における工事施行範囲全面を対象に行うことは不可能で、県道出戸・村松線から南側の平地部で東半部のみを対象にし、第１次調査を開始した。水田部においては、任意の約２ｍ×５ｍの試掘坑を0.4㎡のバックホーにて掘削を行い、遺構・遺物の検出及び土層の観察を実施した。畑地は約２ｍ×２ｍの試掘坑を人力で掘削を行い、遺構・遺物の検出及び土層の観察を実施した。両者合わせた実質調査面積は約176㎡であった。また、埋め戻しは地権者の要望により川砂を入れ、点圧の上行った。なお、現況の水田の各区画が小さく、高低差を有することから、重機の移動が簡単ではなく、畦道の復旧等でかなりの時間を要した。

（２）層　序（第４図）

畑地においては単純な土層堆積を呈し、Ⅰ層耕作土約20～40㎝下ですぐ黄褐色土の地山となる（３、６トレンチ）。水田部についても比較的単純で、大谷川に向かうにつれ地山面までの堆積土が厚くなるが、Ⅰ層耕作土、Ⅱ層暗黒色土を基本とする。なお、Ⅲ層の地山については、礫を含んだ土層と粘質土の土層が見られ、地点によ

第３図　たて屋敷遺跡確認調査トレンチ設定図（Ｓ＝１／2,000）



第４図　たて屋敷遺跡土層柱状図

り異なっている。

（３）遺構と遺物

８及び11トレンチにおいて南北方向の溝を１条確認したが、出土遺物がなく遺構と認定するまでには至らなかった。その他、遺構、遺物ともに全く検出されなかった。

（４）調査のまとめ

上記の結果から、今回の調査対象地点には遺跡が存在した可能性は少ないものと判断される。「町屋敷」と呼ばれる地点についても手掛かりを得ることはできなかった。残念ながら高橋氏から提示された研究成果とは噛み合わない結果であったが、来年度実施される第２次の確認調査の結果を待って、諸問題の検討を行いたい。

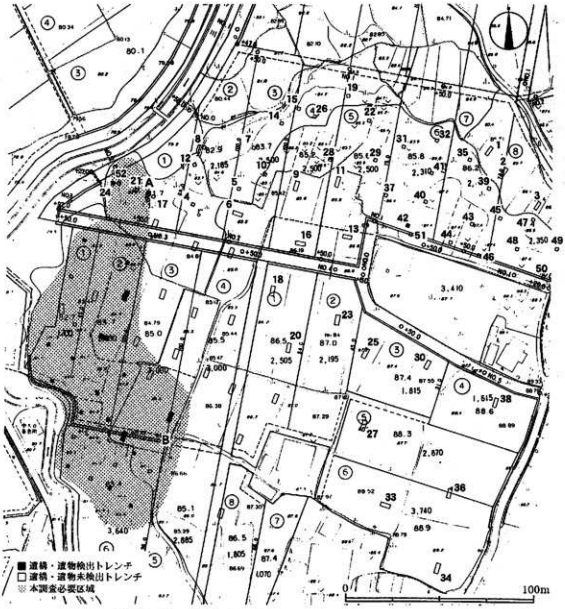
３　蚊口太遺跡第２次調査

（１）遺跡と発掘調査の概要（第５図）

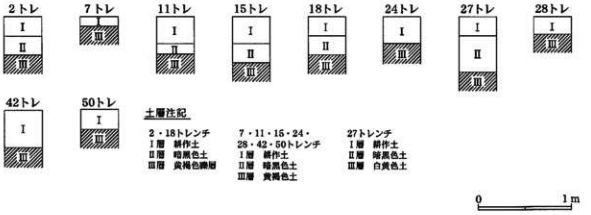
蚊口太遺跡は加茂市大字中大谷字蚊口太ほかに所在する。昭和60～61年度に行われた詳細分布調査で発見された周知の遺跡である〔川上ほか1987〕。遺跡は大谷川左岸で北西方向に展開する段丘上に立地する。平成８年に実施された第１次確認調査で、主に段丘縁辺部から縄文時代中期後半～後期前半の土器が出土し、該期の集落跡の存在が明らかになった〔伊藤1997ａ〕。蚊口太遺跡が立地する段丘はそれほど発達したものではないが、緩やかな平坦面が比較的広く続き、第１次の調査だけでは遺跡の範囲を決めるには不十分であった。

第２次調査は現況での正確な遺跡の範囲を把握し、工事計画とのすり合わせを行うことを目的に、たて屋敷遺跡の調査終了後に行った。水田部においては、任意の約２ｍ×５ｍの試掘坑を0.4㎡のバックホーにて掘削を行い、遺構・遺物の検出及び土層の観察を実施した。畑地は約２ｍ×２ｍの試掘坑を人力にて掘削を行い、遺構・遺物の検出及び土層の観察を実施した。実質調査面積は約316㎡で、第１次調査と合わせると約586㎡を調査したことになる。なお、埋め戻しは作付けを行わないため掘削土で行い、川砂などは不要であった。

三条農地事務所は、昨年度から蚊口太遺跡の取り扱いについては基本的に盛土を行い、畑地を造成することで発掘調査を回避したい意向で協議を進めてきた。しかし、水路等の工事においては一部分掘削する箇所が生じ、遺構確認面まで掘削深度が達するものであったが、掘削幅１～1.5ｍと狭いものであったため、県文化行政課の指導を仰ぎ、立ち会い調査（Ａトレンチ・Ｂトレンチ）を行うことで理解を得た。調査は0.25㎡のバックホーにて掘削を行い、人力にて遺構・遺物の検出を行った。検出した遺構については、断面観察後完掘を行った。なお重機及び遺構測量については工事施行業者からご協力頂いた。測量以外の調査は５月20日の一日で終了させた。その後、６月17日にも一部工事立ち会いを行ったが、遺構・遺物ともに全く検出されなかった。



第５図　蚊口太遺跡確認調査トレンチ設定図（S＝1／2,000）



第６図　蚊口太遺跡土層柱状図

（2）層　序（第6図）

第1次調査で確認した層序と特に変化はない。基本的にはⅠ層耕作土、Ⅱ層暗黒色土で、地山は各地点により、礫含みの黄褐色土層、黄褐色土、白黄色の粘質土のところがある。畑地はそれほど改変を受けておらず、概ね現地表から約10～40cm下で地山となるが、水田部においては切り盛りの造成工事が古くに行われ、高低差があり、層序も一様ではない。なお、33、34、36、38トレンチ周辺においては人為的な攪乱を受けており、本来の層序を保っていない。

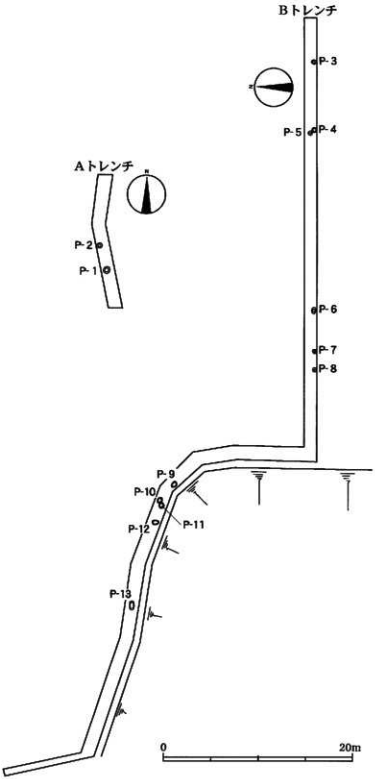
（3）遺構と遺物（第7、8図）

第1次調査では多量の遺物の出土を見たが、今回の調査では1～52トレンチにおいて、遺構は全く見られず、遺物も24及び42トレンチから縄文土器が1点づつ出土したのみであった。

工事立ち会い調査におけるAトレンチは、遺跡北西端部に位置し、やや「く」の字に折れた形を呈し、約20㎡程掘削、調査した。Aトレンチからはピットが2基検出され、ピット1から土器片3点が出土した。ピット1は径45cm、深さ28cm、ピット2は径25cm、深さ23cmを測る。

Bトレンチは、遺跡南半部にあり、東西に横切った後、段丘縁辺に沿って掘削され、約125㎡を測る。ピットが11基検出され、ピット11から土器片5点が出土した。ピットは円形及び楕円形を呈し、径25～45cm、深さ8～26cmを測る。

図示した遺物は、すべて縄文土器片である。1は24トレンチ出土で、孔を有する深鉢形土器の波状口縁部である。孔は楕円形で、外面で2.1cm×1.3cmを測る。口縁端部は凹む。地文は斜縄文を施すようであるが、磨滅が著しく詳細は不明である。胎土に砂粒を多量に含む。2は深鉢形土器口縁部で、やや内湾し、端部は丸くおさめる。地文には斜縄文を施す。3は斜縄文を地文とする深鉢形土器体部片である。2、3はともにAトレンチピット1から出土した。



第7図　蚊口太遺跡立ち会い調査トレンチ遺構配置図（S＝1／400）

これらの資料は小片のため、帰属時期を求めにくいが、1は孔を有する波状口縁部の特徴から、概ね後期前葉の南二十稲場式と考えられる。

第８図　蚊口太遺跡出土遺物

（４）調査のまとめ

今回の調査結果から、概ね遺跡の範囲を確認することが可能となった。遺跡は第１次調査結果報告の際、東方に拡大する可能性を考えたが、土器が24、42トレンチから少量出土したのみで、かなり離れた位置にある42トレンチの土器については他所からの流れ込みと判断したことから、24トレンチ周辺を遺跡の範囲に加えた若干北側に拡大する形となった。第１次と第２次の結果を総合し、遺跡の範囲を示したものが第５図の網点部で、面積約9,300㎡を測る。遺跡は段丘北西～南西縁辺部にかけて展開する、縄文時代中期中葉～後期中葉にかけて営まれた集落跡であったと考えられる。

その後、市教委は県文化行政課の指導を受けながら、調査結果を三条農地事務所に示し、今後の対応を協議した。遺跡は現地表から浅いところに存在することから、耕作土を切土することは認められず、切土を伴わない盛土工法により対処し、発掘調査を回避する方向で決着した。

4　草生津遺跡第２次調査

（１）遺跡と発掘調査の概要（第９図）

草生津遺跡は加茂市大字中大谷字草生津ほかに所在する。蚊口太遺跡同様に昭和60～61年度に行われた詳細分布調査で発見された周知の遺跡である〔川上ほか1987〕。遺跡は大谷川左岸で標高約80ｍの段丘上に立地する。現況は段丘縁辺部が畑地で、南の山稜部は水田化されている。平成７年に農道拡幅部分のみを対象にした第１次確認調査を実施している。小規模なピットが数基検出されたが、遺物は出土せず、調査対象区域も狭く遺跡の内容は把握できなかった〔伊藤1996ａ〕。

第２次調査は、面工事を行う区域を対象に行ったが、第１次調査の所見などから、農道南側の水田部については、改変を受けたことが予想されたため、トレンチ数を限定して実施した。水田部においては、任意の約２ｍ×５ｍの試掘坑を0.4㎡のバックホーにて掘削を行い、遺構・遺物の検出及び土層の観察を実施した。畑地は約２ｍ×２ｍの試掘坑を人力にて掘削を行い、遺構・遺物の検出及び土層の観察を実施した。実質調査面積は約88㎡で、第１次調査と合わせると約153㎡を調査したことになる。

（２）層　序（第10図）

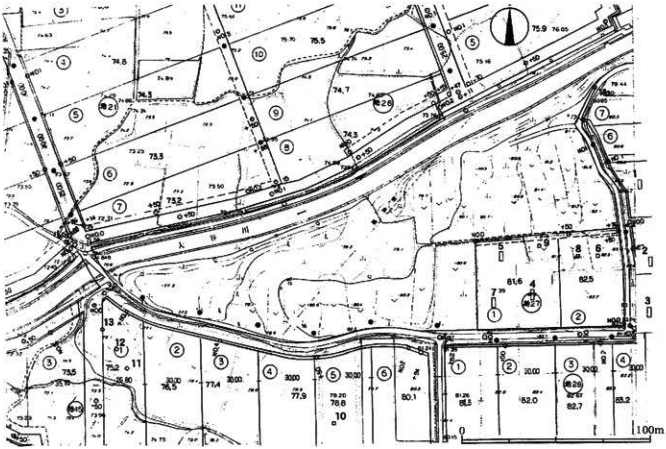
地山まで浅く、Ⅰ層耕作土、Ⅱ層に黒色土ないしは暗茶色土を挟んで、Ⅲ層黄褐色系の地山となる。地山は地点により礫を多量に含むところが存在する。

（３）遺構と遺物

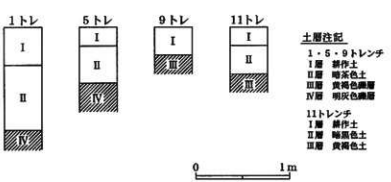
遺構、遺物ともに全く検出されなかった。

（４）調査のまとめ

以上から、工事計画区域においては、遺跡は存在ないしは残存しないことが明らかとなった。恐らく、区域外の段丘縁辺部に小規模な縄文時代の遺跡が展開するものと考えられる。



第９図　草生津遺跡確認調査トレンチ設定図（S＝1／2,000）



第10図　草生津遺跡土層柱状図

5　伝涌泉寺跡遺跡

（1）遺跡と発掘調査の概要（第11図）

伝涌泉寺跡遺跡は加茂市大字中大谷字草生津ほかに所在する。遺跡は大谷川左岸で丘陵裾部の緩傾斜地に立地する。現況は水田及び畑地である。かつてこの地に涌泉寺というお寺があったとされるが、平成７年に行われた詳細分布調査では剝片が１点表採されたのみで、縄文時代の遺跡と把握された。

調査は、地形条件から重機の搬入が不可能であったので、任意の約２ｍ×２ｍの試掘坑を人力にて掘削を行い遺構・遺物の検出及び土層の観察を実施した。人力による掘削土は水田の粘質土であったことから、かなりの労力を要した。７カ所に試掘坑を設定し、実質調査面積は約28㎡であった。

（2）層　序（第12図）

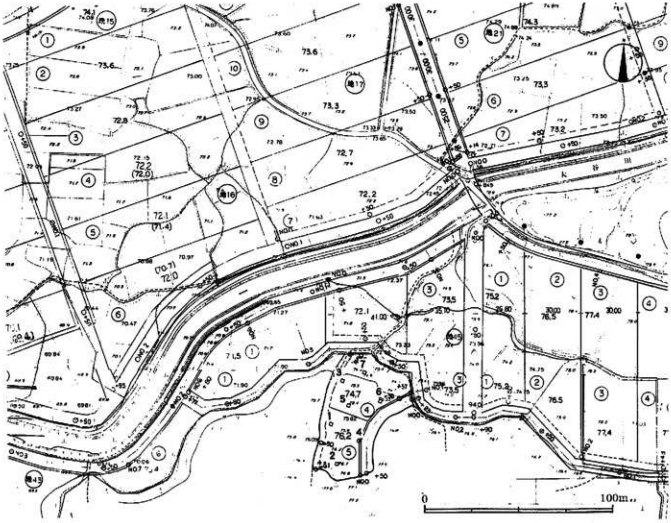
Ⅰ層耕作土、Ⅱ層暗灰褐色土で、地山は黄褐色土である。ところにより、Ⅱ層暗灰褐色土が見られないところがある。

（3）遺構と遺物

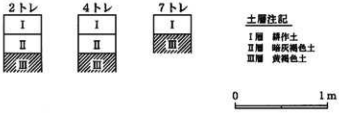
少量の近世以降の陶磁器片などが出土したが、縄文時代の遺物は全く検出されなかった。遺構も検出されていない。

（4）調査のまとめ

以上から、工事計画区域においては、縄文時代の遺跡は確認できなかった。恐らく、開発計画区域周辺の畑地に遺跡が存在するものと考えられる。また、涌泉寺跡についても年代など不明な点が多い。



第11図　伝涌泉寺跡遺跡確認調査トレンチ設定図（S＝1／2,000）



第12図　伝涌泉寺跡遺跡土層柱状図

Ⅲ　雨水排水ポンプ場建設工事関連

1　調査に至る経緯

雨水排水ポンプ場建設工事は加茂市下水道課が担当する公共下水道事業である。西加茂地区の雨水排除を確立するための雨水排水ポンプ場を建設予定で、工事予定面積は約6,000㎡を測る。本事業工事計画地内の一部が周知の遺跡である大塚遺跡の推定範囲に含まれるため、年度当初から事業課と取り扱いについて協議を行い、すでに加茂市所有地であることから、調査日程の調整がついた6月に確認調査を行うこととなった。

加茂市は平成10年5月19日付け加下第218号で文化財保護法第57条の3第1項の規定による埋蔵文化財発掘の通知を行った。その後、市教委は平成10年6月3日付けで埋蔵文化財発掘調査の報告を県文化行政課に行った。

2　大塚遺跡

（1）遺跡と発掘調査の概要（第13図）

大塚遺跡は加茂市大字加茂字大塚、字千代橋、字舟戸、大字加茂新田字諏訪ノ木、字仲江上にかけての加茂川左岸の自然堤防上に立地する大規模な遺跡である。遺跡は平成7年の詳細分布調査で発見・周知されたが、昭和50年代に採集された須恵器甕片が民俗資料館に保管されていることから、遺跡の存在は早くから知られていたものと思われる。

なお、大塚遺跡周辺部においても多くの遺跡が周知され、主として古墳時代前期～中世までの遺跡が確認されている。隣接する石川遺跡からは、線刻絵付き土師器〔伊藤1996b〕、須恵器、珠洲焼〔伊藤1995〕が出土している。また、周辺部で発掘・確認調査された遺跡として釜洲遺跡（未報告）、馬寄遺跡〔伊藤1997a〕などがある。本遺跡と同時期の調査事例は、加茂川を挟んで調査地点から東方約700mの位置にある田上町の道下遺跡がある〔田畑1994〕。道下遺跡からは大型の建物跡が検出されており、該地域を考える上で重要な遺跡である。

調査は、任意の約2m×5mの試掘坑を0.4㎡のバックホーにて掘削を行い、遺構・遺物の検出及び土層の観察を実施した。調査地は以前は畑、水田であったが、その後盛土及び残土置き場となり、周囲の田面から約1m程高い状況であったため、掘削作業に手間を要した。また、安全面においても土壁の崩落などの危険性があり、慎重を期した。実質調査面積は約140㎡である。

（2）層　序（第14図）

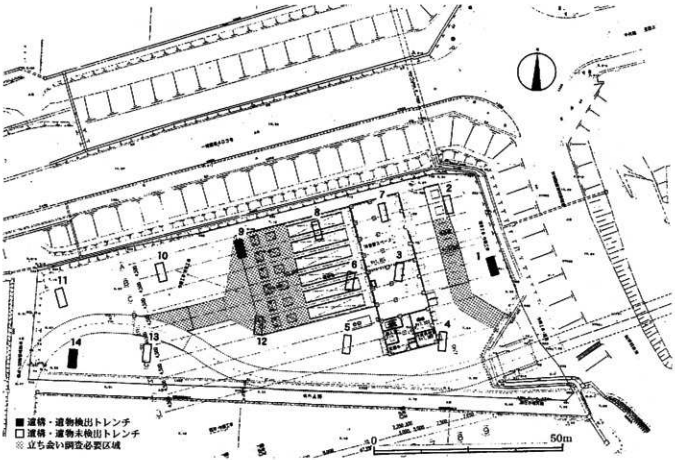
上述したが、調査対象区域のほぼ全域に盛土及び残土が約1m程存在した。その下に旧耕作土層があり、以下は各トレンチにて異なる土層堆積状況を呈する。旧耕作土層の下は概ね灰色を呈する粘質土層が厚く堆積し、それ程顕著ではないが、腐植物層の堆積が認められる。遺物包含層はそれらの下層にあり、暗黒色土を呈する。旧耕作土層から約1m下に存在する。地山は灰色粘質土層であり、遺構確認面となる。

（3）遺構と遺物（第15、16図）

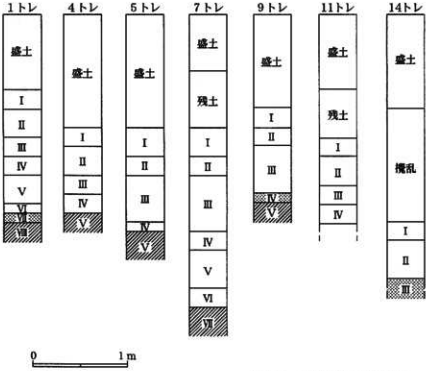
遺構は1、9、14トレンチにて認められた。1トレンチではピット、9トレンチでは溝状遺構、14トレンチでは炭化物を多量に含む不整の遺構が確認された。遺構は発掘していないため、規模・内容等は不明である。

遺物も遺構が確認できた1、9、14トレンチから出土した。総点数は土師器35点、須恵器1点である。1トレンチから比較的大型の破片が出土したが、それ以外は小片である。小片ながら図化可能なものは13点あり、以下に記す。

1～9は土師器無台椀である。1以外はその器形を窺えない。1は、比較的小さい底部から体部がやや内湾し



第13図　大塚遺跡確認調査トレンチ設定図（S＝1／1,000）



土層注記

1トレンチ
Ⅰ層　灰黒色土
Ⅱ層　灰茶色粘質土
Ⅲ層　暗灰黄色土
Ⅳ層　灰色砂層
Ⅴ層　暗灰茶色粘質土
Ⅵ層　暗灰茶色腐植物層
Ⅶ層　暗灰黒色土（遺物包含）
Ⅷ層　灰色粘質土

4・5トレンチ
Ⅰ層　灰黒色土
Ⅱ層　暗茶色土
Ⅲ層　暗灰色土
Ⅳ層　暗灰黒色土
Ⅴ層　灰色粘質土

7トレンチ
Ⅰ層　暗茶色土
Ⅱ層　暗灰色土
Ⅲ層　灰色粘質土
Ⅳ層　暗灰茶色土
Ⅴ層　暗茶色腐植物層
Ⅵ層　茶色腐植物層
Ⅶ層　灰色粘質土

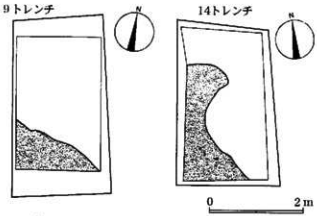
9トレンチ
Ⅰ層　暗茶色土
Ⅱ層　灰黄色土
Ⅲ層　暗灰色粘質土
Ⅳ層　暗灰黒色土（遺物包含）
Ⅴ層　灰色粘質土

11トレンチ
Ⅰ層　暗茶色土
Ⅱ層　暗灰色粘質土
Ⅲ層　灰色砂層
Ⅳ層　暗灰色砂層

14トレンチ
Ⅰ層　暗灰茶色土
Ⅱ層　灰色粘質土
Ⅲ層　暗灰黒色土（遺物包含）

第14図　大塚遺跡土層柱状図

ながら逆「ハ」の字状に立ち上がり、口縁端部はやや外反する。底部は回転糸切りである。口径14.0㎝、器高4.5㎝、底径4.8㎝を測り、器高指数32、底径指数34となる。1トレンチ出土である。2～4は椀の口縁部で、内湾しながら立ち上がり、端部は丸くおさまる。4は口径11.7㎝を測る。5、6は端部が折れ返る椀の口縁部である。7は体部片で外面に2本の線状の墨痕が見られる。小片のため全体のモチーフは不明である。8、9は底部片で8が底径5.4㎝、9が底径4.8㎝を測る。いずれも外面に回転糸切り痕を留める。9以外はすべて14トレンチ出土である。



第15図　大塚遺跡9・14トレンチ遺構確認図

10～12は土師器甕である。10、11は口縁部片で端部が上方に緩く屈曲し受け口状を呈するタイプで、10がより屈曲度が強い。11の内外面の一部に炭化物が付着する。12は体部片で、外面は平行タタキ目、内面は同心円タタキ目が見られる。

13は土師器鍋の口縁部片で、端部が内側に強く折り曲げられる。

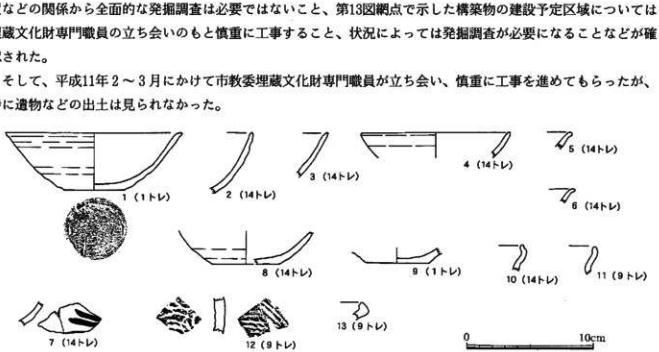
以上の資料から年代を導くことは難しいが、須恵器が極めて少ないことや土師器無台椀及び甕・鍋の口縁部形態などを指標とすれば、概ね9世紀末～10世紀前半頃に位置づけられよう。

（4）調査のまとめ

今回の調査対象地においては、旧耕作土下約1mのところに希薄な分布ながら遺構が存在し、集落の一部である可能性が高い。また、年代は出土した土器から平安時代に比定できる。ただし、その内容から集落の中心部からは若干離れた縁辺部に相当するものと見られる。

今後の対応については、県文化行政課の指導を受け、散発的な遺構・遺物の検出状況及び構築物の建設予定位置などの関係から全面的な発掘調査は必要ではないこと、第13図網点で示した構築物の建設予定区域については埋蔵文化財専門職員の立ち会いのもと慎重に工事すること、状況によっては発掘調査が必要になることなどが確認された。

そして、平成11年2～3月にかけて市教委埋蔵文化財専門職員が立ち会い、慎重に工事を進めてもらったが、特に遺物などの出土は見られなかった。



第16図　大塚遺跡出土遺物

Ⅳ　県営ほ場整備事業関連

1　調査に至る経緯

今回調査の原因となった事業は、加茂市及び三条市に股がる「吉津川地区県営ほ場整備事業」である。その中でも加茂市分が約60％を占め、その受益面積は260haになる。本事業計画は平成11年度に新規採択希望を提出し採択後の平成11～15年度にかけて工事を実施する予定である。該当区全域においては平成７年度に詳細分布調査が県教育委員会主催で実施されたところであり、その際に数カ所で遺跡を確認し、周知化されていた。市教委は平成９年２月に該事業計画を三条農地事務所から伺い、埋蔵文化財の取り扱いについて、三条土地改良区及び三条市教育委員会とともに数回の協議を重ねた。加茂市では平成９年度には調査日程上、該事業に係わる確認調査を行うことが不可能であり、平成10年度以降での対応となった。三条市でも平成９年度は詳細分布調査を行い、確認調査はやはり平成10年度以降となった。

その後、平成10年５月に埋蔵文化財調査検討打合せ会が県文化行政課埋蔵文化財係の職員を招いて開かれ、あらためて吉津川地区県営ほ場整備事業についての説明と遺跡の取り扱いについて今後の方向性が検討された。その中で特に問題になった点は創設非農用地として計画されている区域での遺跡の取り扱いであった。平成11年２月までにその位置を決定しなければならず、早急な確認調査が求められた。加茂市においては約4.8haの創設非農用地を設け、工業団地造成及び知的障害者援護施設建設を計画した。市教委は稲刈り後の９月～10月中旬にかけて確認調査を行う予定を組み、三条土地改良区を通じて、土地所有者の承諾を得るよう依頼した。

工業団地造成計画地は周知の遺跡である馬越遺跡地内に一部かかることから、知的障害者援護施設建設予定地は鬼倉遺跡の範囲に含まれることから確認調査を実施することになった。市教委は７月から国道403号線バイパス工事に伴い、馬越遺跡の一部を発掘調査中であり、この調査の合間を見て実施することとなった。馬越遺跡に関しては、平成10年９月29日付けで確認調査の報告を県文化行政課長宛に行い、調査を開始した。鬼倉遺跡については、知的障害者援護施設建設予定地の位置が決定した平成10年12月の後半に調査を行った。

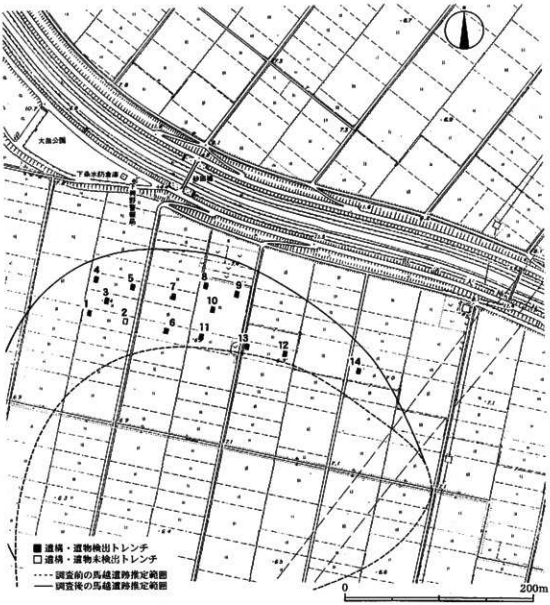
その他の面整備工事に伴う確認調査は平成11年度から開始する予定である。

2　馬越遺跡

（１）遺跡と発掘調査の概要（第17図）

遺跡は加茂市大字下条字馬越地内に存在し下条川左岸の沖積低地に立地する。現況はほとんど水田で、一部が畑として利用されている。馬越遺跡は平成７年の詳細分布調査で発見・周知され、国道403号線バイパス工事に係わり、平成８・９年度に確認調査が実施され〔伊藤1997ａ・1998〕、その結果をもとに平成10年度から発掘調査が行われ、奈良・平安時代の集落跡が検出された〔加茂市教育委員会1998ｂ〕。

調査は調査前の遺跡推定範囲（第17図点線内）に近い計画地の南側部分から行うこととし、任意の約２ｍ×３ｍの試掘坑を0.3㎡のバックホーにて掘削を行い、遺構・遺物の検出及び土層の観察を実施した。埋め戻しは、遺跡の存否いかんにより計画地が変更になること、それに伴い以後農地としての利用が見込まれたため、川砂を入れて点圧し、耕作への影響を考慮した。また、地元の要望で表土約20㎝は耕作土、それ以下全ては川砂を入れた。調査結果は初日から遺跡の範囲が拡大することが明確となる状況であり、発掘調査が必要になることが予想されたことから、当初予定箇所の半分に満たない14箇所の試掘坑を調査して終了した。実質調査面積は約70㎡である。



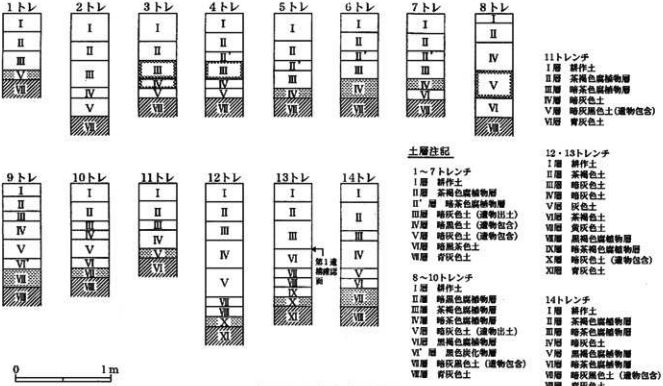
第17図　馬越遺跡確認調査トレンチ設定図（S＝1／4,000）

（2）層　序（第18図）

調査対象区域西側～東側に向かうにつれ、地山面まで土層が厚く堆積し、旧地形においては一様に平坦な状況ではない様相が窺える。基本層序は地点が近接する国道403号線バイパス工事に伴う第1次・第2次確認調査の結果と大きく異なるものではない。遺物包含層は暗灰色及び暗灰黒色土を呈し、1～7、11トレンチ付近においては地表面下約60～80cm下に存在するが、8～10、12～14トレンチ付近においては現地表面下約100～140cm下にとやや深いところに確認される。

なお、Ⅰ層耕作土下に茶褐色、暗茶色の腐植物層が12、13トレンチを除いて堆積し、遺物出土層位との関連から中世以降に付近一帯を厚く覆ったものと考えられる。また、8～10、12～14トレンチにおいてはさらに下位に黒褐色を呈する腐植物層が存在し、古代以降の堆積層と判断される。加茂市域の沖積地の確認調査における土層観察の結果から、これらの腐植物層の存在がある程度共通して堆積している状況が窺え、その堆積年代等を明らかにすることにより、遺跡の年代あるいは集落の廃絶、移動といった問題に情報を寄与するものと考える。

13トレンチにおいては現地表面下約80cmのところに第1遺構確認面があり、さらに約60cm下層から古代の遺物



第18図　馬越遺跡土層柱状図

が出土していることから、古代及びそれ以降の二面の文化層が存在することが窺える。

（3）遺構と遺物（第19図）

遺構はその存在を確認したに停めたが、3、5、6、9、10、11、13、14トレンチからピット、溝、土坑が検出された。13トレンチからはより上面において柱根が遺存したピットが1基検出された。

遺物は2トレンチを除いた全てのトレンチから出土した。特に11トレンチからは比較的大型の破片が出土している。出土総数は平安時代の土師器111点、須恵器58点、灰釉陶器2点、珠洲焼1点、古銭1点、柱根1点である。

1～3は土師器無台椀の底部である。それぞれ底径は6.2、5.4、3.4cmを測り、底部調整はすべて回転糸切りである。4～7は土師器甕である。4は口縁部で、端部が上方につまみ上げられ面を持つ。5、6は体部片で平行タタキ、格子タタキ目が施される。7は底部で、底径は7.6cmを測る。

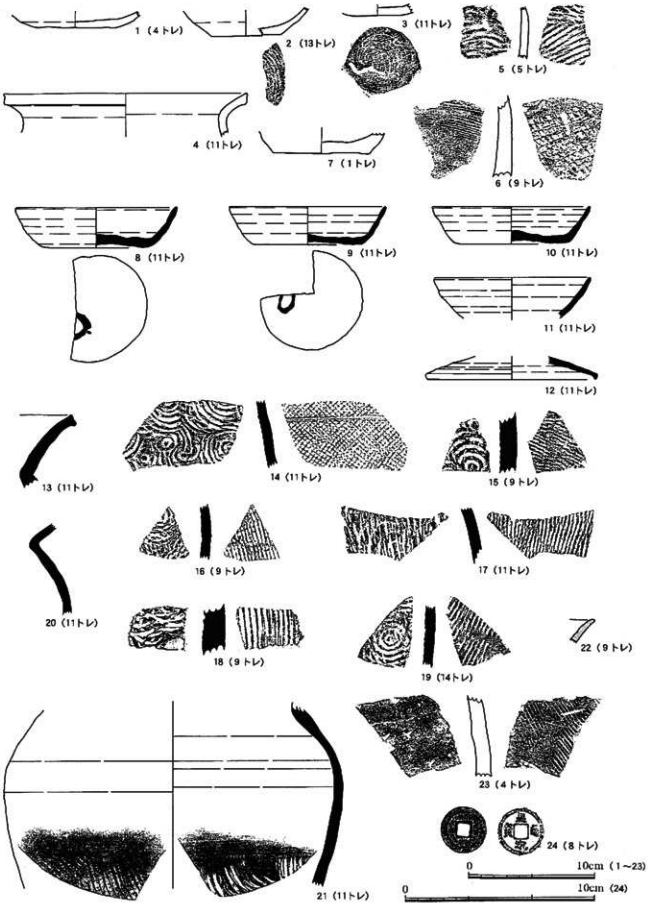
8～11は須恵器無台杯である。8～10はほぼ二分の一強の破片であるが、器形が窺える。いずれもくぼんだ底部から体部が明瞭に屈折して立ち上がる。底部は回転ヘラ切りである。8はやや器壁が厚い。また、8と9の底部外面に類似した記号状の墨書が見られる。9、10は胎土の特徴などから佐渡小泊窯産と推定される。11は口縁部片でやや身が深い。

12は須恵器杯蓋の口縁部片である。端部はほぼ垂直に垂下する。

13～19は須恵器甕口縁部および体部片である。13は口縁部片で端部が横方向にややつまみ出される。内外面に自然釉薬が掛かる。14～19は体部片で、外面タタキの原体が格子（14～16）、平行（17～19）のものがある。内面当て具は17が同心円と平行の組み合わせであるが、他は同心円である。

20・21は壺かと思われる。20は頸部で、口縁部が「く」の字状に屈曲する。21は体部でやや上位に最大径を持つ。下半部内外面にいずれも平行のタタキと当て具痕を留める。

22は灰釉陶器の椀ないしは皿の口縁部片である。本資料は9トレンチ出土であるが、図示はできないが11トレ



第19図　馬越遺跡出土遺物

ンチからも類似した灰釉陶器椀・皿類の体部片が1点出土している。22は端部がやや外反する。胎土は緻密で、灰白色を呈する。淡緑色の釉が内外面に掛かる。

23は珠洲焼甕体部片である。磨滅のため明瞭ではないが、外面に比較的目の細かいタタキが見られる。焼成が甘く、軟質な感じを受ける。

24は銭貨で、初鋳年が1038年の「皇宋通寶」で北宋銭である。

以上の資料はかなり広範囲から出土したものであり、かなりの年代幅を含むものである。1～22の古代の土器については、佐渡小泊窯産の須恵器無台杯の器形や灰釉陶器の存在などから概ね9世紀中～9世紀後半頃に位置づけておきたい。

（4）調査のまとめ

以上から、該事業計画地内においては平安時代の集落跡が存在することが明らかとなった。この結果は、発掘調査を行っている国道403号線バイパス地内の調査結果とほぼ同様の内容であることが窺え、いわゆる馬越遺跡の範囲が下条川に向かい大きく拡大する状況を示している。また、13トレンチ周辺区域においては平安時代以降の遺跡が存在する可能性も高い。このことから、かなりの面積で発掘調査が必要と判断される。

現在、この調査結果を踏まえ、工業団地造成計画予定地は別所にて計画変更がなされたため、発掘調査は行わないこととなっている。

3　鬼倉遺跡

（1）遺跡と発掘調査の概要（第20図）

鬼倉遺跡は加茂市大字下条字鬼倉、字砂田、字横道、大字天神林字窪田、大字矢立新田字八反田地内ほかの下条川右岸の沖積地に大規模に展開する遺跡である。馬越遺跡同様に平成7年の詳細分布調査により発見・周知され、国道403号線バイパス工事に係わり、平成8年度に確認調査が実施され〔伊藤1997ａ〕、平成9年度に発掘調査が行われた。その結果、堰状遺構を伴う河川跡を中心に、建物跡や土坑などが検出された。遺物も多量に出土し、多数の墨書土器を始め石帯、銭貨（和同開珎、神功開寶）などの注目すべきものがある〔加茂市教育委員会1998ａ〕。

調査対象地は現在の下条川の左岸にあり、遺跡推定範囲の北西端にあたる。現況は水田である。調査は約9,000㎡を対象にし、任意の約2ｍ×3ｍの試掘坑を0.3㎡のバックホーにて掘削を行い、遺構・遺物の検出及び土層の観察を実施した。埋め戻しは、川砂を入れて点圧し、耕作への影響を考慮した。実質調査面積は約67㎡である。

（2）層　序（第21図）

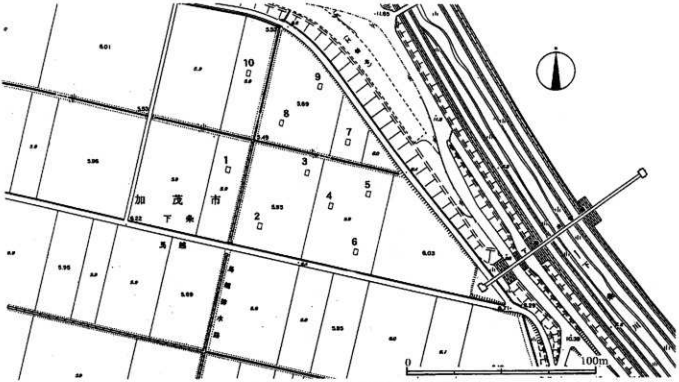
各トレンチともほぼ同じ状況の土層堆積であった。Ⅰ層耕作土の下に、Ⅱ・Ⅲ層の床土があり、それ以下は厚く腐植物層が堆積する。Ⅸ層とした暗灰色土を挟んで地山面となる。現在の地表面から地山面までの深度は約1.2～1.5ｍである。

（3）遺構と遺物

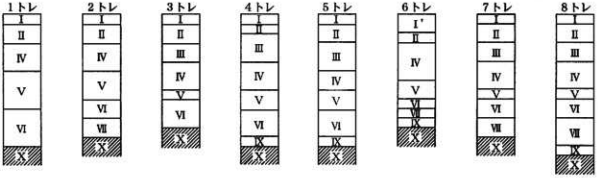
今回の調査対象区域内においては遺構・遺物ともに全く検出されなかった。

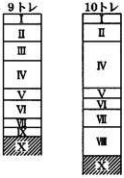
（4）調査のまとめ

以上の結果から、今回の調査対象区域内においては遺跡は存在しないものと判断でき、工事による埋蔵文化財への影響は特にないものと考えられる。



第20図　鬼倉遺跡確認調査トレンチ設定図（S＝1／2,000）





土層注記

1～10トレンチ
Ⅰ層　耕作土
Ⅰ'層　客土（6トレ）
Ⅱ層　暗灰色土
Ⅲ層　黄灰色土
Ⅳ層　暗灰茶色層植物層
Ⅴ層　茶褐色層植物層
Ⅵ層　黒褐色層植物層
Ⅶ層　暗茶色層植物層
Ⅷ層　暗黒茶色層植物層
Ⅸ層　暗灰色土
Ⅹ層　青灰色土

0　1m

第21図　鬼倉遺跡土層柱状図

Ｖ　ま　と　め

平成10年度の加茂市内遺跡確認調査は開発行為に伴い７遺跡を対象に行われた。平成７年度から開始した本事業も４年次目を迎え、平成７年度２遺跡１地点、平成８年度６遺跡、平成９年度６遺跡、平成10年度７遺跡と平成８年度に調査件数は倍増し、以後ほぼ同数の調査件数となっている。

大谷地区の県営中山間地域農村活性化総合整備事業に関しては、平成７年度、平成８年度、そして本年度と３年次にわたり確認調査が行われてきた。開発計画地内に所在する６遺跡に対し、５遺跡（うち１遺跡は約半分未了）については開発と埋蔵文化財保護の立場両面から協議が進んでおり、現在までのところ発掘調査を実施する遺跡はない。蚊口太遺跡については、本年度調査結果から遺跡範囲を明確に示し、極めて浅いところに縄文時代の集落が存在することから、削りを伴わない盛土を行い畑地として利用されることになった。たて屋敷遺跡については、地名や地籍図の検討から指摘されていたような中世城下町の諸相については全く検出することができなかった。来年度実施される残り半分の調査結果を待って、再度検討したい。草生津遺跡、伝浦泉寺跡遺跡については遺構・遺物とも検出されず、遺跡が存在する地点が異なることが予想される。

大塚遺跡は加茂川左岸に展開する大規模な古代の遺跡であるが、今回の雨水排水ポンプ場建設予定地においては遺物・遺構が散発的に出土し、遺跡の中心地点からは離れた区域と考えられるが、概ね９世紀末～10世紀前半頃の年代が明らかになったことは重要である。今後、表採資料なども検討し、大塚遺跡の年代幅などについて詳らかにしたい。

下条地区の県営ほ場整備事業に関しては、来年度以降事業が本格化するにつれ遺跡の確認調査件数が増加するものと思われる。今回は市事業となる非農用地における各工事計画に伴い、確認調査を行った。ひとつは周知の遺跡である馬越遺跡に極めて隣接した周辺部が対象になったが、たくさんの遺物が出土し遺跡範囲の拡大が明確となった。馬越遺跡は国道403号線バイパス工事に伴う発掘調査が本年度実施され、８世紀中頃～10世紀前半の集落跡が検出されているが、各時期の遺物・遺構がやや地点を違えたところから出土することから、今回の資料も土地利用の変遷を窺う上で重要である。鬼倉遺跡については調査対象地が推定範囲内にあったが、全く遺跡は確認できなかった。この調査結果からとりわけ沖積地に存在する遺跡の範囲を示すことは容易ではないこと、遺物が全く表面採集できない区域においても完全には遺跡の存在を否定できないことが理解できよう。それ故、より精度の高い分布調査、確認調査を実施することが求められるわけであり、今後の大きな課題としたい。

【引用・参考文献】

伊藤秀和　1995　「加茂市における中世の遺跡について（一）」　『加茂郷土誌』第18号　加茂郷土調査研究会
伊藤秀和　1996ａ「平成７年度加茂市内遺跡確認調査報告書－屋敷田遺跡　上大谷地内　草生津遺跡」　加茂市教育委員会
伊藤秀和　1996ｂ「加茂市石川遺跡出土の線刻付き土師器について」　『越佐補遺巻2　創刊号　越佐補遺巻の会
伊藤秀和　1997ａ「平成８年度加茂市内遺跡確認調査報告書－丸潟遺跡　鬼倉遺跡　馬越遺跡　蚊口太遺跡　寺屋敷跡　馬寄遺跡」　加茂市教育委員会
伊藤秀和　1997ｂ「加茂市下条鬼倉遺跡発掘調査速報」　『加茂郷土誌』第20号　加茂郷土調査研究会
伊藤秀和　1998　「平成９年度加茂市内遺跡確認調査報告書－丸潟遺跡　新道遺跡　馬越遺跡　上條館跡　中沢遺跡　石川遺跡」　加茂市教育委員会
春日真実・上野一久　1997　「新潟県埋蔵文化財調査報告書第87集　上郷遺跡Ⅱ」　新潟県教育委員会・財新潟県埋蔵文化財調査事業団
春日真実　1997ａ「越後・佐渡における９世紀中葉の画期」　『北陸古代土器研究』第６号　北陸古代土器研究会
春日真実　1997ｂ「越後における10・11世紀の土器様相」　『北陸古代土器研究』第７号　北陸古代土器研究会
金子正典・田村浩司　1997　「末迎寺遺跡」　三条市教育委員会
加茂市史編纂委員会　1975　「加茂市史」下巻　加茂市
加茂市教育委員会　1998ａ「鬼倉遺跡発掘調査結果速報」
加茂市教育委員会　1998ｂ　「馬越遺跡発掘調査現地説明会資料」
川上貞雄ほか　1987　「東部地区遺跡詳細分布調査報告書」　加茂市教育委員会
坂井秀弥ほか　1989　「新潟県埋蔵文化財調査報告書第53集　山三賀Ⅱ遺跡」　新潟県教育委員会
坂井秀弥・鶴間正昭・春日真実　1991　「佐渡の須恵器」　『新潟考古』第２号　新潟県考古学会
高橋雅弘　1997　「加茂市内及びその周辺の中世城館跡（その一）－七谷地区を中心に（上）－」　『加茂郷土誌』第19号　加茂郷土調査研究会
田畑　弘　1994　「諏下・白地遺跡」　田上町教育委員会
永井久美男編　1994　「中世の出土銭　出土銭の調査と分類－」　兵庫埋蔵銭調査会

凡 例

法 量（cm） 口＝口径 底＝底径 高＝器高
胎 土 石＝石英 長＝長石 金＝金雲母

蛟口太遺跡

番号	出土位置	種 別	器 種	部 位	法 量	胎 土	色 調	焼成	成 形 ・ 調 整	備 考
1	24 トレンチ	縄文土器	深 鉢	口縁部		石・砂礫	10YR7／2	不良	斜縄文？	円孔
2	AトレP－1	縄文土器	深 鉢	口縁部		石・砂礫・金	7.5YR5／4	普通	斜縄文	
3	AトレP－1	縄文土器	深 鉢	体 部		石・砂礫	5YR6／6	普通	斜縄文	

大 塚 遺 跡

番号	出土位置	種 別	器 種	部 位	法 量	胎 土	色 調	焼成	成 形 ・ 調 整	備 考
1	1 トレンチ	土師器	無台椀	口～底部	□14.0 底4.8 高4.5	石・長	10YR8／3	良好	底外回転糸切り	
2	14 トレンチ	土師器	無台椀	口縁部		石・長・金	10YR7／3	普通		
3	14 トレンチ	土師器	無台椀	口縁部		石・長	10YR6／1	普通		
4	14 トレンチ	土師器	無台椀	口縁部	□11.7	石・長	7.5YR7／4	普通		
5	14 トレンチ	土師器	無台椀	口縁部		長	2.5Y8／1	普通		
6	14 トレンチ	土師器	無台椀	口縁部		石・長	7.5YR7／4	普通		
7	14 トレンチ	土師器	無台椀	体 部		石・長	10YR8／3	普通		体外墨書
8	14 トレンチ	土師器	無台椀	底 部	底5.4	石・長	2.5Y8／1	普通	底外回転糸切り	
9	1 トレンチ	土師器	無台椀	底 部	底4.8	石・長	10YR8／3	普通	底外回転糸切り	
10	14 トレンチ	土師器	甕	口縁部		石・長・砂礫	7.5YR6／2	不良		
11	9 トレンチ	土師器	甕	口縁部		石・長・砂礫	10YR4／1	普通		内スス
12	9 トレンチ	土師器	甕	体 部		石・長・砂礫	7.5YR8／4	普通		
13	9 トレンチ	土師器	鍋	口縁部		石・長・砂礫	7.5YR8／2	普通		

馬 越 遺 跡

番号	出土位置	種 別	器 種	部 位	法 量	胎 土	色 調	焼成	成 形 ・ 調 整	備 考
1	4 トレンチ	土師器	無台椀	底 部	底6.2	石・砂礫	2.5YR7／6	不良	底外回転糸切り	
2	13 トレンチ	土師器	無台椀	底 部	底5.4	石・長	7.5YR6／2	不良	底外回転糸切り	
3	11 トレンチ	土師器	無台椀	底 部	底3.4	石・長	10YR8／3	普通	底外回転糸切り	
4	11 トレンチ	土師器	甕	口縁部	□19.1	石・長・砂礫	7.5YR8／4	普通		
5	5 トレンチ	土師器	甕	体 部		石・長・砂礫	10YR3／1	普通	内外平行タタキ	外スス
6	9 トレンチ	土師器	甕	体 部		石・長・砂礫	10YR5／1	普通	外格子タタキ	
7	1 トレンチ	土師器	甕	底 部	底7.6	石・長・砂礫	7.5YR8／3	普通		
8	11 トレンチ	須恵器	無台杯	口～底部	□12.6 底8.0 高3.2	長・白鳥色粒	N／5	不良		底外墨書
9	11 トレンチ	須恵器	無台杯	口～底部	□12.2 底8.6 高3.0	白色粒・黒斑	N／6	良好		底外墨書 小泊窯産
10	11 トレンチ	須恵器	無台杯	口～底部	□12.6 底9.2 高3.9	白色粒・黒斑	N／7	良好		小泊窯産
11	11 トレンチ	須恵器	無台杯	口～底部	□12.2	長・白鳥色粒	N／6	不良		
12	11 トレンチ	須恵器	杯 蓋	口縁部	□13.2	白色粒	N／5	普通		
13	11 トレンチ	須恵器	甕	口縁部		白色粒	N／5	普通	内外自然釉	小泊窯産
14	11 トレンチ	須恵器	甕	体 部		白色粒	N／3	普通	内同心円、外格子タタキ	
15	9 トレンチ	須恵器	甕	体 部		石・長・砂礫	N／5	普通	内同心円、外格子タタキ	
16	9 トレンチ	須恵器	甕	体 部		長・白鳥色粒	N／5	普通	内同心円、外格子タタキ	
17	11 トレンチ	須恵器	甕	体 部		石・長	N／7	普通	内平行・同心円タタキ、外平行	
18	9 トレンチ	須恵器	甕	体 部		石・長・砂礫	N／3	普通	内同心円、外平行タタキ	
19	14 トレンチ	須恵器	甕	体 部		石・砂礫	N／8	普通	内同心円、外平行タタキ	
20	11 トレンチ	須恵器	壺	頸 部		白色粒	N／5	良好	外自然釉	
21	11 トレンチ	須恵器	長頸瓶	体 部		石・長・砂礫	N／5	良好	内外平行タタキ	
22	9 トレンチ	灰釉陶器	椀皿類	口縁部			10YT／	良好	内外面淡緑色釉	
23	4 トレンチ	珠洲焼	甕	体 部		石・長・砂礫	N／5	不良	外目の細かいタタキ	

番号	出土位置	種別	銭名	字体	国名	初鋳年	銭径（A）	銭径（B）	内径（C）	内径（D）	銭厚	重目	備考
24	8 トレンチ	古銭	皇宋通寶	真書	北宋	1038	25.20mm	25.00mm	20.52mm	20.73mm	1.26～1.52mm	3.3g	

第２表 遺物観察表

報告書抄録

ふりがな	かもしないせきかくにんちょうさほうこくしょ
書名	平成10年度加茂市内遺跡確認調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	加茂市文化財調査報告（9）
編著者名	伊藤秀和
編集機関	加茂市教育委員会
所在地	〒959－1313　新潟県加茂市幸町2丁目3番5号　☎（0256）52－0080
発行年月日	西暦　1999年5月20日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
たて屋敷遺跡（やしきい）	加茂市大字下大谷（かもしおおあざしもおおたに）字岩野492（あざいわの） 他	15209	125	37度36分44秒	139度7分17秒	19980407～19980411	176	県営中山間地域農村活性化総合整備事業
蚊口太遺跡（かくちだいせき）	加茂市大字中大谷（かもしおおあざなかおおたに）字井沢（あざますざわ）344 他	15209	69	37度36分48秒	139度8分6秒	19980413～19980421 19980520 19980617	461	県営中山間地域農村活性化総合整備事業
草生津遺跡（くさうずいせき）	加茂市大字中大谷（かもしおおあざなかおおたに）字草生津（あざくさうず）471 他	15209	70	37度36分41秒	139度7分37秒	19980420～19980422	88	県営中山間地域農村活性化総合整備事業
伝涌泉寺跡遺跡（でんびょうせんじあといせき）	加茂市大字中大谷（かもしおおあざなかおおたに）字草生津（あざくさうず）503 他	15209	159	37度36分38秒	139度7分30秒	19980422～19980423	28	県営中山間地域農村活性化総合整備事業
大塚遺跡（おおつかいせき）	加茂市大字加茂（かもしおおあざかも）2540－1 他	15209	126	37度40分14秒	139度2分43秒	19980603～19980605	140	公共下水道事業（雨水排水ポンプ場建設）
馬越遺跡（うまこしいせき）	加茂市大字下条字（かもしおおあざげじょうあざ）馬越甲（うまごしこう）1784 他	15209	117	37度39分6秒	139度1分36秒	19980929～19981001	70	県営ほ場整備（工業団地造成）
鬼倉遺跡（おにくらいせき）	加茂市大字下条字（かもしおおあざげじょうあざ）馬越甲（うまごしこう）2027 他	15209	116	37度39分34秒	139度1分14秒	19981224～19981225	67	県営ほ場整備（知的障害者援護施設建設）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
たて屋敷遺跡	包蔵地	中世		なし	
蚊口太遺跡	包蔵地	縄文時代	ピット	縄文土器	
草生津遺跡	包蔵地	縄文時代		なし	
伝涌泉寺跡遺跡	包蔵地	縄文時代		なし	
大塚遺跡	包蔵地	平安時代	溝	土師器	
馬越遺跡	包蔵地	平安時代	溝	土師器、須恵器、灰釉陶器	墨書土器
鬼倉遺跡	包蔵地	平安時代		なし	

写　真　図　版

たて屋敷遺跡遠景　南東から

たて屋敷遺跡調査風景

3トレンチ土層断面　西から

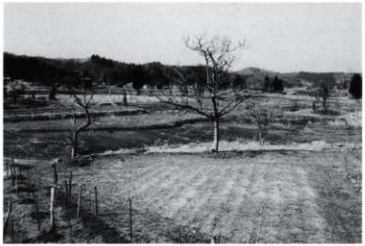
5トレンチ土層断面　東から

6トレンチ土層断面　西から

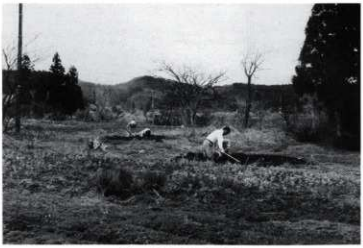
11トレンチ土層断面　北から

13トレンチ土層断面　北から

16トレンチ土層断面　東から



蛟口太遺跡遠景　東から



蛟口太遺跡調査風景

蛟口太遺跡調査風景

2トレンチ土層断面　南から

7トレンチ土層断面　北から

11トレンチ土層断面　北から

18トレンチ土層断面　西から

24トレンチ土層断面　南から

28トレンチ土層断面　北から

50トレンチ土層断面　東から

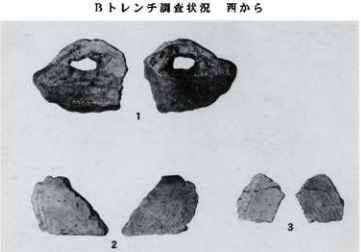
Aトレンチ調査状況　南から

P－1穴掘状況　北から

Bトレンチ調査状況　東から

Bトレンチ調査状況　西から

P－9～12穴掘状況　北西から



蛟口太遺跡出土遺物

草生津遺跡遠景　北から

草生津遺跡調査風景

5トレンチ土層断面　南から

11トレンチ土層断面　西から

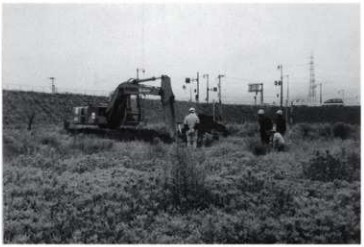
伝浦泉寺跡遺跡遠景　南東から

伝浦泉寺跡遺跡調査風景

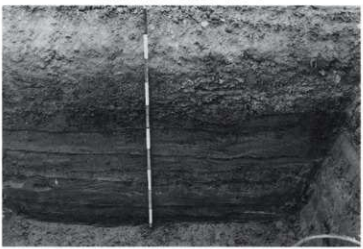
2トレンチ土層断面　南から

7トレンチ土層断面　南から

大塚遺跡調査地近景　西から



大塚遺跡調査風景

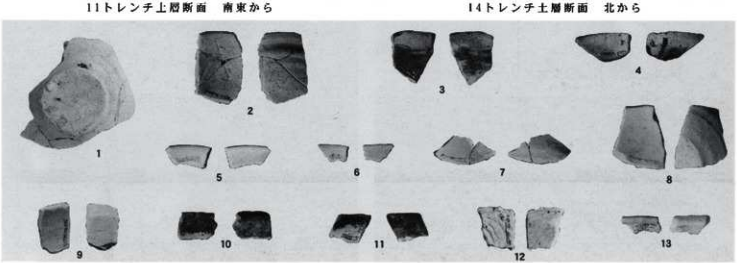


1トレンチ土層断面　西から

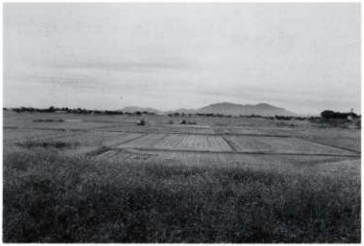
9トレンチ土層断面　南東から

11トレンチ土層断面　南東から

14トレンチ土層断面　北から



大塚遺跡出土遺物



馬越遺跡調査地遠景　北東から

馬越遺跡調査風景

5トレンチ土層断面　南から

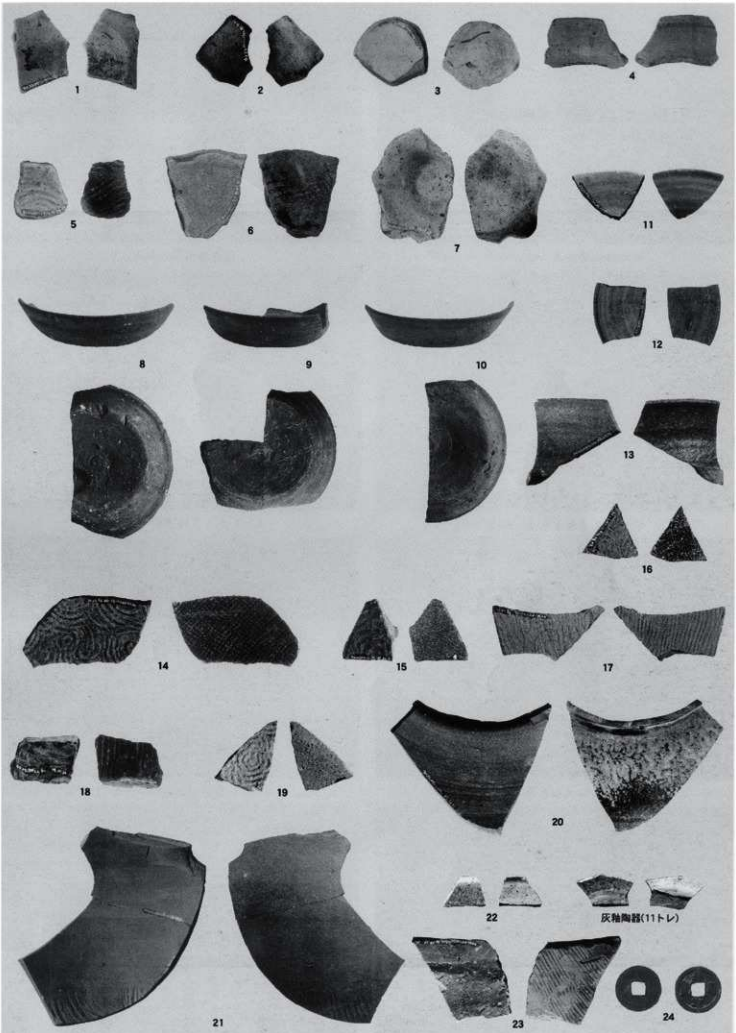
6トレンチ土層断面　南から

9トレンチ土層断面　南から

13トレンチ上層面遺構確認状況　南から

13トレンチ土層断面　南から

14トレンチ土層断面　南から



馬越遺跡出土遺物

鬼倉遺跡調査地近景　東から

鬼倉遺跡調査風景

3トレンチ土層断面　南から

4トレンチ上層断面　南から

5トレンチ土層断面　南から

7トレンチ土層断面　北から

8トレンチ土層断面　北から

10トレンチ土層断面　北から

発行日　平成11年5月20日
加茂市文化財調査報告（9）

平成１０年度　加茂市内遺跡確認調査報告書

たて屋敷遺跡・蚊口太遺跡・草生津遺跡・伝涌泉寺跡遺跡
大塚遺跡・馬越遺跡・鬼倉遺跡

発行者　加茂市教育委員会
新潟県加茂市幸町２丁目３番５号
☎（0256）52－0080

印刷所　有限会社　いとう印刷
新潟県加茂市駅前４番４号
☎（0256）52－0696